日本工从 六人

展送 轉遊遊遊遊

四昌

> QUN.川川二二:-: 日本兀炊大炊

хсоссидх

ONEXON DIANCE THE NUMBER OF THE NUMBER OF

NN, $\delta \delta$ 3 neyc are note the condition of the condition

XNOUS NUUSEA UPIA NACPUS ED XNOUS NAGNOS UX XCECS NASUNDUN NUU N $\overline{0}$ Disea unuega epu noo disea enue nuuganas nuus engenuu aikxxna upia enuukaia uoing ed ux dca unus

DNN'|/||-:-:\

まえがき

西暦 2018 年 4 月 8 日に成立して以来、日本机戦連盟は日本において我々の文化を案内し、人と人の心をつないできた。だが、その言語文化に親しむためには、非常に多数の場所に混沌と散らばった資料を読み込むことが要求されてきた。

日本机戦連盟としてもただ手をこまねいていたわけではない。西暦 2023年には、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署(珲因五火丛四日坑基二日本日面)による冊子 孚卅乙メ る 動幅 する (邦題:『84字でらくらく燐字入門』)を頒布した。この本は、アイル共和国の全ての人が知っている 84種の燐字を示すものであり、これを通じて燐字文化に親しんでもらおうと努力した。西暦 2024年には、かるた UDMEMS 3UMN ÓБXБ35 を頒布し、遊びを通じて東島通商語を構成する 18 の文字を記憶してもらえるよう努力した。

しかしながら、たとえ84の燐字と18のペメセペ文字を暗記したとしても、それだけでは我々の声を聞いて理解することはできないし、我々に思いを伝えることも極めて困難であろう。

いま、我々は、語を選び抜き、辞書を作った。この辞書の内容を全て理解することで、日本机戦連盟が送り出してきた全てを読むことができるだろう。

西暦 2025 年 5 月 4 日

日本机戦連盟

東諸島共和国連合

众丛众曻



島名一覧(燐字・東島通商語)

хидприхи диюир зими езеизию



編集

hsjoihs [細系充]

編集協力

双叶舞[橘兀亚]

meloviliju[‡井里]

校閲

Μίττον [巾ワ日]

双叶舞[橘兀亚]

meloviliju[神斗曹]

紙面レイアウト えすわい [巾枞刀]

DTP組版

hsjoihs [細系充]

親字グリフ手書き えすわい[巾枞刀]

フォント製作

えすわい[巾枞刀]

hsjoihs [細系充]

たもと[凡几函]

CI/CDパイプライン構築

れもん[芑炴杏]

組版ソフトウェア

Vivliostyle (https://vivliostyle.org/)

BURGANE

专是

游字

この辞典の使い方

1. 見出し字

1-1. 収録字の選定

まえがきで提示した「日本机戦連盟が送り出してきた全てを読む」という 観点に基づき、330 字程度を選定するとともに、異体字も50 ほど採録した。

1-2. 分類と配列

例外として、「単純な1画のみ」で構成される字は、それを2回繰り返して判断する。要するに、たとえば | の字は | の爪見出しのもとに配列されるということである。さらに、ソで始まる字は数が多いため、検索の便宜のために、ソの中でも文および火で始まる字は別の爪見出しの下に配置した。また、初画が口の一部を成している字は口に配置することを原則としつつも、これまた所属字が多いことを鑑みて曰および田で始まる字は別立てとした。これらの例外は | 量図更系冊における既存の慣習に従ったものである。

同じ爪見出しの下に属する字の間の順序は特に定めなかったが、近形の字をなるべく近くに配置するよう心掛けた。

1-3. 漢字転写

燐字文化に対する日本語話者の親近感を醸成する目的で、アイル共和国文化省対外広報処日本語部署はそれぞれの燐字の字体ごとに漢字をあてがい、「漢字転写」を定めている。(一例を挙げると、兀然という語を「机戦」と表記して「きせん」と読むといった行為は、この漢字転写に基づくものである。)日本語話者にとって字の意味や文の意味を概括する上で極めて有用であ

ることを鑑み、この辞書では漢字転写を墨付きカッコの中に入れて表示する こととした。

1-4. パイグ音とその表記

2. 見出し語

2-1. 収録語の選定

燐文において、なにを「単語」と認定するかは極めて難しい問題である。 この辞書では、実用性に資するべく、構成字から語義を導き出すことが本質 的に困難であるような音写語や固有名詞といったものを積極的に収録した。 特に、豊かなボードゲーム・カードゲーム文化に関心の強い読者の参考に供 するため、これらにまつわる用語を重点的に扱った。

収録語は燐字圏全体に広く通用するものを優先しつつ、選定した約330字のみによって構成されている語だけを収録した。また、パイグ語簡易辞書としての利用も可能となるよう、パイグ語での用例を優先し、例文もパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けた。

ただし、パイグ語で頻用される語であっても、表音文字であるパイグ文字で書くのが一般的である語については、それを無理に当て字した燐字表記を掲載することは避けた。具体的には、「トゥー→ドゥー→ルー→ドゥー→」や「トゥー→ルー→ドゥー→ルー→」(ともに『ほにゃらら』『なんちゃら』などの意味)を強引に書き表す労争

東サースの意味)を強引に書き表す労争

東サースの意味)を強引に書き表す労争

東東・ヴァースの表記は見出し語としていない。

3. 品詞欄と品詞分類

それぞれの見出し語には、パイグ語での用例をもとに、品詞欄を設けた。 その語形変化の乏しさも伴って、パイグ語の品詞論は未だ定説を見ないが、 便宜上次のような基準を設けて品詞分類を行った。以下、「単語未満」・「一単語」・「複数の単語の組み合わせ」の3種類に大別して論じる。

3-1. 単語未満

独立した要素として文中に単独で登場することのできない、いわば「単語未満」としては、「略号」・「接頭辞」・「接尾辞」の3種類を認定した。

「略号」とは、文中で用いるのではなく、もっぱら図や記譜などの場面で 用いられる、表意的な記号としての燐字の使用を意味する。

単独の語としてではなく、他の字や語の前や後ろについて結合して単語を 形成するようなものを「接頭辞」「接尾辞」と分類した。

3-2. 一単語

人や物などを表す語、およびそのような語と似た構文的ふるまいを見せる 語を「名詞」と分類する。

物事の動作や状態などを表し、文の中核となる語を「動詞」と分類する。 その中でも、状態を表す傾向が強く、構文的にも目的語や進行相マーカー と取りづらいものを特に「状態動詞」と分類する。また、動詞のうちその目 的語として節を取るものは「節要求動詞」と分類する。

形式上は文の中核の位置に生起するものの、実質的な意味を持たず、ただ主部と述部の間を分離しつつ繋ぐ役割を持つものは、「繋詞」と分類する。

名詞を直後に伴って、文全体を修飾するようなフレーズを作る語を「前置詞」と分類する。また、名詞のうち、前置詞を用いることなく文の舞台となる時間・場所を表せるものを、それぞれ「時間詞」「場所詞」と分類する。

他の文中に現われるのではなく、感情を直接表現するために発される類の 語を「間投詞」と分類する。その中でも、その感情の原因を直後に叙述すべ く節を取るものは「節要求間投詞」と分類する。

直後の名詞を構文的・意味的に修飾する傾向が強いものは便宜上「連体詞」と分類する。ただし、述語としての用法が多く見られるものは基本的に「状態動詞」と分類した。

文末に来て、文に対してニュアンスを付加する役割を持つ語を「文末助詞」 と分類する。 直前に数量表現を伴い、その量や順位といったものを具体化する表現を 「助数詞」と分類する。

文と文を繋ぐ役割を持つ語を「文接続詞」、名詞と名詞を繋いで新たな名詞を作る語を「名詞接続詞」として分類する。

歴史的経緯によって成立し、決まり文句として定着した4文字からなる表現は「四字熟語」として分類する。多くは田専昌に代表されるラネーメ古典に由来するような表現であり、現代パイグ語の品詞論には必ずしもそぐわない構成となっている。

副詞

後置副詞

命令副詞

3-3. 複数の単語の組み合わせ

複数の字が組み合わさって単一の意味を表していると認定できるものの、その構成要素となる字が文中では必ずしも連続せず、間に他の語が割り込む余地があるようなものが多数存在する。これを単語と認めず、辞典に収録しない方針も可能ではあったが、燐文の言語感覚をしっかりと理解する上で、これらのいわば「分割可能な熟語」の把握は不可欠であるため、積極的に掲載するよう努めた。

分割可能なそれぞれの部分が文成分として明確に認定できる場合は、「動詞 +目的語」「主語+動詞」「動詞+前置詞」などと表記し、例文を通じてどの ような位置で分割可能となるのかを示すこととした。そのような分析をする 根拠が薄弱である場合は、無理に既存の品詞論に当てはめず、「構文」とのみ 表記することとした。

4. 語義と訳語

4-1. 語義の分類

語義には、先頭に品詞を記した。品詞が同一であっても、語義が大きく異なる場合については行を分けた。

4-2. 補足説明

語が持つ意味に対しての補足説明は、()で示した。語自体のパイグ語での頻度や構文的制約などについて付記すべきことがある場合は、[]で示した。また、必要に応じて行を改め追加の説明を行った。

5. 例文

語の用い方を簡潔に示すため、一部の見出し語には例文を添えた。例文はパイグ語の発話として自然なものとなるよう心掛けつつ、パイグ文字で表記される語を避け、選定した燐字だけで全て書ける文を掲載し、訳文をつけた。解釈の幅を適切に伝えるべく、必要に応じて1つの例文に対して複数の訳文を掲載したり行を改め追加の説明を行ったりするなどして明確さを追求した。